

欧米人からみた日本の住様式、住文化について  
千森 督子  
(和歌山信愛女短大)

目的：現代の日本の住宅は洋風化が一段とすすみ、生活様式も椅子座が主流となり、洋風主体の新たな文化圏に移行した感じがする。しかしながら、依然として継承されている伝統的な生活様式や住文化もあり、欧米では日本的なものが高く評価されている流れも認められる。本研究では日本で生活している欧米人が伝統的な生活様式や住文化をいかに受けとめ、評価しているのかを探る中で、これからの住様式、住文化を摸索してみたい。

方法：関西に在住している欧米人を対象に、質問紙法を用いて調査を実施した。有効回収数は35である。調査年月は平成7年12月～8年1月である。

結果：履き物を脱いで生活する様式に関しては、本国との違いにも関わらずに過半数が「床が汚れずに清潔である」「リラックスできる」と感じ、「不潔」としたり「慣れないので生活しにくい」の否定的な回答は1割にも満たない。座りやすさでは半数が椅子を支持しているが、日本の住まいで最も印象深いとする量に関しては感触（5割）や転用性（4割）、匂い（3割）、柔らかさ（2割）などを評価している。床に直接座る時のスタイルは性別に関係なく、あぐらが過半数を占め最も多く、次に「膝を伸ばす」である。就寝時に布団を用いるのは6割あり、その8割が毎日畳んでいる。布団使用者の過半数が布団の寝やすさを肯定している。風呂と便所が別々の衛生空間の造りに関しては6割が、さらに、洗い場と浴槽が別々の形式に関しても7割が使用しやすさを評価している。しかしながら湯を入れ替えずに複数の人が入浴することに関しては、半数が不潔と感じている。また床の間を知っている6割が日本住宅には床の間を必要としている。